

## 談話室

## 海外生活を通して裾野を広げる (異文化コミュニケーション雑録)

谷川 貴紀 \*

## Broadening My Horizons through Overseas Life (My Intercultural Communication Experience)

Takanori TANIKAWA \*

## Abstract

I first started my overseas life in France after my Ph.D. I planned to spend two years there, but I got the chance to work in Germany afterward. Now nine years have already passed since leaving Japan. I have learned the difference in work style and work-life balance between Japan and Europe. On top of that, the experience always brought me new valuable ideas. In this article, I will report on my overseas life and working experience in France and Germany.

## 1. はじめに

筆者は、恵まれたことに修士時代と博士時代に共同研究を行っていたフランスの研究者の方々に声を掛けていただき、博士号取得直後(2011年)から海外生活を始めることになった。日本を飛び出した直後の予定では、最初の1年は北フランスのルールにあるルール第一大学、次の1年はパリ郊外のサントーバンにあるソレイユ放射光施設の計2年間の滞在計画であった。渡仏の目的は、当時の自分が不得手としていた自由電子レーザー(以下、FELと略称する)の理論やシミュレーションの知識を深めることであった。しかしながら2年の海外滞在終了目前にして、日本に戻る前にやはりモノ作りや実験もしたいと思い、ダメ元で応募したドイツ北部のハンブルクにあるドイツ電子シンクロトロン研究所(以下、DESYと略称する)にて幸いにもFEL開発に関わるポジションを頂くことができ、ドイツにてまた新たな海外生活を始めることになった。そしてその3年後、現所属の欧州X線自由電子レーザー施設(以下、EuXFELと略称する)に異動し、気が付けば現在10年目の欧州生活に突入している。

本稿は学会誌の「談話室」のコーナーに掲載されるということで、筆者が所属した施設の情報や

筆者の研究報告など専門的な話よりも海外生活について重点を置かせていただき、海外の話に興味がある方、またはこれから海外で生活することを検討されている方に、ちょっとした息抜きに本稿を読んでいただければ幸いである。また筆者は長年日本から離れていることもあって日本の最新情報には疎くなっており、以降、日本のことで何か誤り等があればご容赦いただきたい。

## 2. 海外生活を始めるにあたり

欧州生活を始めるまでの筆者の海外経験というのは国際学会で訪れた数か国のみであり、フランスもドイツも訪問した経験はなかった。さらに、筆者は英語を得意としてはいなかったもので、日本を飛び立つ前は不安しかなかった。それでも、日本にいては得られない多くの知見を得たいと思い、自身の背中を猛プッシュしてフランスに乗り込んだことを今でも鮮明に覚えている。

筆者は当時の予定よりも長く欧州生活を過ごすこととなってしまったが、そのおかげで長期滞在というものや国際学会や海外旅行、海外出張のような短期滞在というものとの大きな違いがわかった。それは、当たり前のように聞こえるかもしれないが、現地で「生活をし、根付く」ということである。短期滞在は、周りの物の目新しさに夢中

\* 欧州X線自由電子レーザー施設 European X-ray Free-Electron Laser Facility GmbH  
(Takanori Tanikawa E-mail: takanori.tanikawa@xfel.eu)

になり、また英語圏でなくても英語だけで何とか過ごし、現地で生活を送っている人々とさほど交流もせず旅を終えることができる。しかし長期滞在の場合は現地の人と、現地の言葉で関わって向き合っていかなければならない。英語圏でも英語圏なりの苦勞が生じることは想像できるが、英語圏でない国に滞在の場合、言語の壁は高い。

例えば子供でもわかるようなことが、言葉がわからないばかりに右往左往しながら単語一つ一つを辞書で調べなければならぬ。システムを知らないばかりに電車やバスの券売機にて有効でない乗車券を買ってしまったたり、無駄な浪費をしたりする(週末は定期券で指定のエリア以外も追加運賃無しで乗り放題になる等)。役所などから来る郵便物は何が書いてあるのかさっぱりわからない。おいしい夕食を食べたいと思ってレストランに入ってもウェイターと意思疎通ができないために注文ができない。これら以外にも多々あるが、このように、自分がまるで赤子になったかのように現地の人の手助けなしでは困難が多く、初めはできることが非常に限られてしまう。そういうわけで滞在を始めたばかりの頃は何をするにしても一々時間がかかるし自由度も少ない。ありとあらゆる情報集めが肝となる。

特に、滞在を始めて早急に行わなければならない第一の関門が、自分が居住する家を探して契約することと外国人局で滞在許可を無事に取得することである。滞在許可が下りなければそこで生活を続けていくことはできないので、滞在許可の審査を無事通過し、許可証が手元に来るまでの間、不安になりながら仕事をしていたことを覚えている。こうした慌ただしい時間の中で新しい環境・職場に馴染みつつ、ようやく生活基盤が整ったかなと感じることができるようになるのに2~3ヶ月位というのが個人的な経験である。その頃から、少し気持ちに余裕ができ、仕事も流れに乗り始め、海外生活を楽しむことができるようになる。1年間の長期研究滞在で海外に来られる方は、大体そこから半年位海外生活を満喫し、最後の2,3ヶ月は帰国に向けた準備で再び慌ただしくなるようである。

1年間の滞在の場合、自分や自分の家族のことだけで手一杯なまま1人称視点な海外生活の終わりを迎える。しかし、もしチャンスがあるならば



図1 フランス滞在時に、一般公開されていた近所の教会のクリスマス・イベントに一人で乗り込んで異文化交流させてもらった時の様子。

もう少しだけ長く滞在してみるのはどうだろうかと筆者はお勧めしたい。もう一歩進んだ先に、自分がその国に住んでいる1人の「外国人」として客観的に見ることができるようになり、その国の、そこに住む人々の、ひいては研究所の情勢などの本質が見え始めてくるように思っており、滞在の経験がより実りの大きなものになると考えている。ともあれ、色々苦勞が絶えない海外生活だが、現地の方々の多大な助力があつて自分の生活が成り立っていることはいつでも忘れずにいたい。そしてこれから海外に滞在される方には是非異文化コミュニケーションに果敢に挑戦してほしいと思う。

### 3. フランス生活

#### 3.1 フランスでの私生活

フランスは、筆者にとって初の海外生活の拠点となった場所だったこともあり、良くも悪くも多くのカルチャーショックを経験した。自分の英語もままならなかったが、なぜか欧州人は皆英語が話せるという思い込みがあつたため、フランス語が話せないと自分の生活が成り立たないということに愕然とした。一般的に、フランス人は英語が話せてもフランス語で接してくるのが普通である。これは義務教育課程で英語を習ってきたはずの日本人が英会話に自信を持たず英語で話すことを避けようとすることに似ていると思われる。勿論、自分の母語に頼りたくなるのは当然であるが、筆者がここで申し上げたいことは、拙い英語でも良いのでコミュニケーションを交わしてもらえることの有難さである。とりわけ、海外に来て

から理解したのは、日本人は外国人と比べて奥手な性格の場合が多く、自分から話題を振る、自分の意見を述べるというのがあまり得意でないらしいということである。しかしながら欧州では、自分から積極的に自分の意見を述べないと相手にしてもらえないことがよくある。つまり自分から積極的に動かない限り、コミュニケーションの中で自分は淘汰されてしまうのである。日本人が海外で生活していく場合、これは乗り越えなければいけない壁であると筆者は感じた（奥手ではない方はそういう苦労は経験されないだろうが、筆者はこの点でかなり苦労した）。筆者にとって、この点を理解し、なんとか乗り越えたというのが海外生活で得られた大きなものの1つであり、このおかげで今でも無事に海外生活を送れていると考えている。

話を戻して、フランスでの生活だが、一般的に思い描く中世の街並み、数多くの歴史ある建物や美術、街の広場や電車の中でクラシックを演奏する人、そして週末のマルシェ（オープンマーケット）は祭りの食べ物屋台を訪れたような気分させてくれる。筆者はワイン通ではないが、ワインを安く飲むことも魅力的であった。このようなステレオタイプなフランスの印象は容易にご想像いただけるかと思う。しかしこうした煌びやかなものだけではないこともあることを理解しておいていただきたい。さもなければ自分が思い描いていたものとのギャップに悩まされることもある。筆者も「色々」と経験させていただいたが、全く予期していなかったのは秋冬の天候の悪さである。少なくともリールやパリでは、その時期は雨雲に覆われている日が多く小刻みに小雨が降る（故に折り畳み傘の携行は必須である）。加えて緯度が高いため、冬場は日照時間が短く気温も低い。日本では経験しないこの悪天候に慣れるまでは精神的に堪えるようで、いかに太陽の光を浴びることが大事かということを感じた。お喋りが好きなフランス人にとってコーヒータムは欠かせないものだが、春になって天気が良くなるとカフェのテラスで太陽を浴びながらコーヒータムを楽しむ人々をよく見かける。日本人もこの秋冬の経験をすれば痛いほど気持ちがわかるようになるだろう。

またドイツでもそうだが、フランスを語る上で

外せないのがバカンス（数日以上の有給休暇）である。とりわけ、フランスではバカンスを楽しむことがその人の人生の価値を決める、というのを聞いたことがある。夏場のバカンスで肌を小麦色に焼いたフランス人女性研究者が職場で称賛されているのを見て、日本の色白な肌を美とする現在の文化と真逆の価値観に驚かされた。また貯金も、バカンスにお金を費やすことに意義を感じているようであり、バカンスの話をするのはフランス人との日常会話の上で大事な世間話の話題の1つであることを付け加えておく。

欧州滞在において、週末の時間の使い方が日本とは異なってくる。その大きな理由として、（キリスト教の影響らしいが）日曜日は礼拝に捧げる日という由縁から、レストラン、カフェ、パン屋以外は閉まっており、大きな物音を出すようなことや共用の洗濯機部屋も使用時間が制限されていた。それ故に土曜日はスーパーへの買い出し、そして部屋の掃除と忙しい日になる。週末や祝日も店が開いている日本と比べると初めは不便に感じるだろうが、住んでいるとそのうち慣れてくるものである。

### 3.2 フランスでの仕事

筆者はリール第一大学においてはレーザー物理研究グループ、ソレイユ放射光施設においては挿入光源グループに所属した。この2つのグループはフランスの新規FEL建設プロジェクトのために協力研究をしている関係であり、筆者はこのプロジェクトのための外部資金で雇われた。筆者が所属していた当時、このプロジェクトは常伝導加速器もしくはレーザープラズマ加速器を用いてFELを発振、そしてレーザーシーディング技術を用いてFEL光をフルコヒーレントにするという計画であった。今はレーザープラズマ加速の方を進めているようである。筆者はそこでレーザーシーディング技術に関わる様々なシミュレーションに従事した。

勤務形態としてはフレックスタイム制で、出勤時間は午前9時頃、退勤時間は午後5時を過ぎると周りに人がほとんどいないというのが一般的であった。家の用事等で出勤できない場合はテレワークを利用する人もよく見かけた。職場のミーティングやメールは基本的に筆者が在席する場合のみ英語で、それ以外はフランス語であった。



図2 リール第一大学の同僚らと夏のBBQパーティー。

リール大学のキャンパス内は誰でも立ち入り可能であるため、建物の玄関だけでなく廊下のあちこちにもカードリーダーが設置されており、平日の勤務時間外と週末・祝日はこのカードリーダーに自分のカードをスキャンさせながら通行しないと防犯システムが作動し警報が鳴る仕組みになっていた。筆者も一度そのような時間に仕事を試みたが、居室から出るたびにこの警報システムを作動させないよう気を揉まなければならなかったの(もし警報を鳴らしてしまっても、フランス語で問い詰められて対応できないことを予想したため)、それ以来職場に遅くまで残ることを諦めた。そもそも急務でない限り、遅くまで残業したり週末に職場で仕事をしたりすること自体が不健康であるという考えもあるからだろう。この考えはドイツでも同様で、ドイツ人同僚も仕事のオンとオフの切替えがはっきりしており、筆者が欧州生活に馴染んでいくうちに、生産効率を考えるとこの考えは非常に合理的であると学んだ。

有給休暇に関して言えば、日本では有給を使い切りにくいという話を聞いたことがあるが、欧州では有給消化率はほぼ100%に近い。むしろ有給が残りそうな状況になった場合、ドイツでは人事から有給を使い切るように催促が来る。欧州の有給日数は概ね30日近くあるが、日曜日以外の日が祝日になる日は日本と比べてかなり少ない。祝日と有給を合算した場合、日本も欧州も概ね同程度であると思われ、欧州では自分の好きなタイミングで有給が取れる分、柔軟な有給計画を立てやすい。

## 4. ドイツ生活

### 4.1 ドイツでの私生活

ドイツで新生活を始めた際、フランスでの新生活の際に受けたカルチャーショックと比べると、もちろん言語の違いはあれども、自分の中で欧州生活に慣れてきたこともあって、それほど戸惑うことはなかった。ドイツでも同様にドイツ語が求められるものの、ドイツはEU内でも経済水準が高いため欧州内でも多くの人々がドイツに移住してくることもあり、また英語教育が良いらしく、フランスと比べると英語が通じることが多い。それ故に、フランスでは常に辞書を持ち歩いてフランス語をなんとか話そうとしていたためにフランス語の上達は早かったが、ドイツではドイツ語の上達は遅かった(むしろ英語が上達した)。また、ドイツでは研究者や高度な技術を持った技能者などを優遇する措置を取っており、滞在許可に必要な審査の厳しさが軽減されるほか、永住許可をもらうための必要な要求も軽減される。

まずハンブルクに来て驚いたのは、バスも電車も深夜でも運行されているので所謂終電を気にする必要がない点であった。またフランスと同様、日曜日や祝日は店が閉まっているのだが、ドイツでは生活上の細かなルールが決められている。まず平日と土曜日の昼間の2時間と夜9時以降(地域によって時間帯などは異なって定められている)と日曜・祝日は全日、部屋で大きな音(掃除や洗濯等)を立ててはいけない。アパートの契約書にも、機械を使って庭の芝刈りを日曜・祝日に行ってはいけない、広いバルコニーを持っていてもBBQを行ってはならない等という細かい記述がある。また1年毎に、前1年で使用した水道光熱費のチェックがあり、差額があれば返金もしくは追加徴収が来る(故に水道光熱費を使いすぎているのかどうか判断しにくい)。印象として、水道代は日本より高く、アパートにバスタブがついていたとしても日本のように湯舟に入る入浴をしては水道代が大変なことになるため、基本的にはシャワーで済ますことが多い。

スーパーでは、フランスでもそうであったが有機食品(BIO)の関心が高く、BIOと書かれた食品が多く揃っており、BIO専門店も多い。菜食主義の方も多く、BIO専門店ではそのような専用の



図3 ハンブルク市庁舎前のクリスマスマーケット。

乳成分が含まれていないチーズや肉製品を使っていないソーセージ等の食品も豊富に扱っている。ちなみに、EuXFELの食堂も毎日菜食主義の方専用のランチセットが提供されている。エコも強く推進されており、例えば飲料に使われるペットボトルや瓶は購入の際に飲料代にリサイクル料を上乗せして支払い、後日スーパーに設置のリサイクルマシンにボトルを返却してリサイクル料を返金してもらうシステムになっている。また、ビールが驚くほど安く（ミネラルウォーターより安い物もある）、レパトリーも非常に多い。夏場は日中からレストランでビールを飲んでいる人々を見かけるし、オクトバーフェストではウェイトレスの方が1Lのビールジョッキを10個位担いで忙しそうに運んでいることからわかるようにビールの消費量が凄い。夏場の夜になると繁華街ではビール瓶片手に人々が集まっている光景を見かけるのは普通で、ドイツ人のビール好きが覗える。またBBQも定番で、夏場のDESYキャンパスでは週に一度はどこかでBBQパーティーが開催されていた。

冬場は、本場のクリスマスマーケットが大いに賑わう。場所によっては身動きが取れないほどの盛況振りである。とりわけ、グリューヴァインと呼ばれるシナモン等のスパイスを加えた温かい赤ワインが名物で、寒さが染みる北ドイツでは体を温めてくれる。毎年デザインが変わるカップに入れて提供されるので、持ち帰ってコレクションに加えることが筆者の密かな楽しみである。

#### 4.2 ドイツでの仕事

筆者は、DESY 滞在時には当時建設されたばかりのFLASH2のコミッショニングとそのマシンのシード型FEL化プロジェクトのためにシミュ

レーションや機器開発に従事していた。このプロジェクトは保留となってしまったが、現在はFLASH自体の電子ビームエネルギーを向上させ、FLASH1のアンジュレータを更新し、シード型FEL専用のマシンにするプロジェクトが走っている。これはイタリアのElettra放射光施設にあるFERMI加速器の強い影響を受けての結果だと思われる。

そして筆者が現在所属しているEuXFELの近況を簡単に報告させていただくと、電子ビームエネルギーは設計予定通り17.5 GeVまでの加速が可能となり、また3本のX線FELライン（硬X線2本、軟X線1本）で同時レーザー発振が可能となっており、先日25 keVでのレーザー発振に成功した。近い将来計画として、現在2本の未建設FELラインがあるので、そこにどのような光源を設置するか検討中である。筆者はその提案としてシード型FEL光源や超硬X線FELライン等の可能性を模索している。さらに先の将来として、現在バーストモードと呼ばれる特殊なビーム運転を行っているが、これをCWモードで運転する可能性や、さらなるFELラインの増強などの検討が始められている。

DESYでは様々な国籍の研究者が働いているが、それでも比較的ドイツ色が強い。EuXFELは、国際会社（欧州の資本を纏めて運営しているので研究所ではなく会社というスタイルをとっている）であるため、実に様々な国籍の研究者が働いており、ドイツ色の限りではない。DESYで行われる会議は、大体は英語でされたが、ドイツ語でされる会議もしばしばあった。所内アナウンスは、ドイツ語と英語両方記載されたメールが一般である。変わって、EuXFELでは英語を公用語としているため、会議も所内アナウンスも英語のみとなっている。このように、言語が壁となる海外生活において自分の仕事に直接関係することだけでなく、様々な情報が英語で共有されることは有難い。また、DESYには国際課という外国人研究者のサポート専門の部署があり、ドイツでの新生活を始める際には、大いに助けていただいた。日本の研究所でも、そういう部署がある所では外国人研究者にとって非常に心強い存在であろうと推察する。

勤務形態としては、上司からの許可があれば自

分の都合に合わせてテレワークをすることに問題はなく、病欠の場合も有給休暇の日数を減らすことなく有給休暇と同じ扱いとなるので、病気であるのに無理して出勤することは逆に好ましいことではない。雇用においては、ドイツに限らず欧州全体的に、研究職や技術職の女性の割合が日本に比べて多いように見える。また契約社会でもある故か、一般の企業でもそうであるが、任期無しのポジションを得るまでに時間がかかるようである。自分の印象では、研究者は大体40歳になる前ぐらいに任期付きから任期無しのポジションに移行できる人が多いように見える。だが知り合いに、50歳になってようやく任期無しのポジションを得た研究者もいる。これらからわかるように、ドイツでは博士研究者の数はかなり多く、シニアの博士研究者がプロジェクトを引っ張っていることも少なくない。また、任期無しのポジションを得るまでに、研鑽を積み、より給与の高い所、労働環境や福利厚生の良い所を求めて動き回っている人も見られる。特にEUの国籍を持っている人は、EU内のどの国でもビザを必要とせず定住し仕事ができるため、日本と比べると流動性が高いように見える。しかし加速器の研究者は、固有な加速器の運転・維持・管理が求められるため、その限りではないように見える。また研究所には、ゲストとして外国に行き長期滞在する人、逆に外国から来られてこちらで滞在される人の数も多く、世界各国との活発な研究交流の様子が覗える。

さて、ドイツでも日本と同様に施設の一般公開というものがある。おおよそ2年毎に DESY と EuXFEL は共同で開催している。ハンブルクに来てから一般公開に施設スタッフとして毎度参加しているが、都度驚かされる。まずは夜の日付が変わるまで公開していることで、特に夜のライトアップや装飾はさすが欧州らしくカラフルである。アミューズメント感も強く、昼間は子供達も多く見学に来ており、例えば液体窒素で冷やして作った即席シャーベットは人気である。キャンパス内には祭りのように食べ物の屋台が設置されているほか、様々な体験コーナーもあり、筆者は EuXFEL の VR ブースを近年担当している。おおよそ3 km に及ぶ EuXFEL の光源加速器だが、地下深くのトンネル内に設置されているため、運転停

止中であっても特別なトレーニングを受けて許可された者しか自由には入ることができない。そのためトンネル内には移動式カメラで随時トンネル内の様子を撮影し、ネットを通してトンネル内の状況を確認できるようになっている。このデータを流行りの VR スコープを通して見ることで、自分が実際にトンネルの中を歩いているように感じるバーチャルツアーを提供している。

またドイツでは、施設の予算の中の福利厚生もなかなか潤沢なのか、EuXFEL では一年に二度の職員向けのレクリエーションイベントがある。夏のイベントは職員及びその家族を招待して、外部からエンターテイナーを雇って家族全員で楽しめるものとなっており、冬にはクリスマスパーティーを職員向けに行っており、職員の中の有志が集まって催し物を行う。このような内輪のイベント以外にも、EuXFEL 建設完了時、初 X 線レーザー発振祝い、ユーザー運転開始祝い等で地元の政治家や市長、EU 内の官僚の方らを招いて豪華なパーティーを開いており、その規模の大きさに毎度驚かされる。



図4 EuXFEL のキャンパス内に設置された巨大な仮設テント内で行われた EuXFEL のユーザー運転開始記念式典の様子。



図5 前施設長の退官パーティーにて、筆者近影(左端)。

## 5. 最後 に

色々他にもお伝えしたいことはあるが、最後に、筆者が長年の欧州生活を経て、現地の人々を見てきて思わされたのは、人生を楽しんでいるということである。普段から仕事と私生活の切り替えをきっちりと行い、忙しい時でも敢えて休暇を取ってリフレッシュすることが、より効率的に仕事ができるようになることを経験し、仕事のオンとオフを使い分ける大切さを学んだ。また異国の地で貪欲に挑戦を続けることで、新たな価値観を多く得ることができた。加えて、多くの欧州の優秀な研究者の方々に出会い、一緒に仕事をし、絆を深めることもできた。これらのことは、日本には知り得なかった或いは成し得なかったであろうと思う。このような数々の小さな経験を経て、裾野を広げ、自分の土台をより強固にし、研究生活の中で人生をより実りあるものにする方法

をこの欧州生活を通して学んだ。そしてこれからも学ぶのであろう。忘れてはいけないのは、現地では「外国人」である筆者がこのような無事平穩に海外生活を送ることができているのは周りの人々の多くの手助けと家族の支えがあつてこそである。ここで感謝を申し上げたい。

もし海外生活を検討されていらっしゃる方がいれば、失敗や物怖じをせずに異文化コミュニケーションに果敢に挑戦してほしい。価値観の引き出しを大いに増やし、物事をさらに多角的に見ることができるようになるチャンスが海外生活の中であちこちに散りばめられており、それを手に入れることで、自分自身の成長や今後の研究活動に必ず役に立つことがあると筆者は申し上げたい。そして、この海外生活で得た経験や知識を、いつの日か日本でもお役に立てることができればと思いつつ、ここで筆を置くことにする。